

〈論文〉

アルゼンチンのナショナリスト、
フリオ・イラススタの思想
——第二次世界大戦時を中心に——

睦 月 規 子

はじめに

小稿で取り上げるフリオ・イラススタ Julio Irazusta (以下、イラススタと略称する)は、『アルゼンチン・ナショナリスト』と自称し同国でそう目されている知識人¹⁾のなかでも著名な人物である。

アルゼンチンのナショナリストは、1930年以来同国で繰り返された軍事クーデターにしばしば係わったことから、強権主義者とみなされてきた。特に、イラススタや彼の兄ロドルフォ Rodolfo Irazusta, パラシオ Ernesto Palacio, カルージャ Juan E. Carulla ら、1927年に週刊紙 *La Nueva República* を創刊したヌエバレプブリカーノス *nuevarepublicanos* については、1930年のクーデターに関与したこともあって、軍事政権を正当化する典型的な「アルゼンチン右翼」という評が根強い²⁾。

アルゼンチンの言論界では *La Nueva República* 創刊以降、1930年代にナショナリズム思潮が盛り上がったが、この時代に名を成したナショナリスト知識人の多くは第二次世界大戦時、米国の対枢軸断交要請を内政干渉と非難し、自国の中立を主張した。他の米州諸国が枢軸と断交し参戦していくなかで、アルゼンチンが長期に渡って中立を維持したのも、国内の中立機運に支えられてのことだったのである。

アルゼンチンのナショナリストは全般に組織力に欠け、常に「政治シス

テムの周辺に留まった」にもかかわらず、その思想は同国政治に甚大な影響を及ぼしたと言われる³⁾。中立主義は、彼らのそうした思想的影響力の強さを示す好例として取り上げられてきた。ここではまず、中立主義解釈を中心に、ヌエバレプブリカーノスに代表されるいわゆる「1930年代ナショナリスト」に関する所説を概観しておこう。

1950年代前半までの研究では、彼らをファシストとみなす説が有力であった。実際、アルゼンチンでは大戦中、ナチスを模倣した団体が増大し、その機関誌は中立主義の拡声器と化していた。また、伝統的にドイツ崇拜傾向の強い陸軍将校団を中心に、軍部は1943年6月、文民政権に中立放棄の気配ありと判断しクーデターを起こす。これら軍民双方の中立主義者とドイツとの緊密な関係が大戦直後、米国国務省によって暴露されたこともあり、中立主義者は全て枢軸を支援するファシストだとする見解が支持され、1930年代ナショナリストもその列に加えられたのである⁴⁾。

この解釈は、軍事政権の実質的指導者であり1946年の民政移管選挙で大統領に選出されたペロン Juan D. Perón をファシストと非難する反ペロニズム論と一対で提出されたものである⁵⁾。しかし、1955年のペロン政権崩壊以降、アルゼンチン国内で同政権が評価され始め、中立主義についても新しい解釈が提出された。軍事政権時代、労働者の福利向上に尽力し、彼らから支持されたペロンの大衆性を評価する人々は、彼が指導した中立外交もファシズムではなくポピュリズムのコンテキストから解釈するべきだとし、ペロン政権に多くのメンバーを輩出したフォルハ FORJA（アルゼンチン青年急進勢力、Fuerza del Origen Radical de la Joven Argentina の略）の中立主義に注目するようになったのである⁶⁾。

フォルハは1935年6月、急進党（正式には急進的市民連盟、Unión Cívica Radical）の青年党員が結成した分派組織である。結成時、「我々は植民地アルゼンチンである。我々は自由アルゼンチンを欲する」⁷⁾というスローガンを掲げた彼らは、「民主主義列強と呼ばれるすでに成功した帝国主義勢力と、全体主義諸国と呼ばれる満たされない帝国主義勢力との覇権

攻防戦」で植民地状態にある自国民の血を流すなど訴えた⁸⁾。

こうした事実が明らかにされたことで、1960年代以降、中立主義には反帝国主義に基づく大戦不関与の主張も含まれていたという修正解釈が広く支持され⁹⁾、中立を主張したナショナリスト知識人についてもそれまでの見解が見直されるようになった。フォルハの反帝国主義が1930年代のナショナリズム思潮のなかで育まれたものだとすれば、この思潮を単純にファシズムのアルゼンチン版とみなすのは間違いではないか。研究者たちはそう考え、1930年代ナショナリズムの先駆的かつ主導的論者であったヌエバレプブリカーノスに注目し始めたのである。

今日までに提出された研究の圧倒的多数は、ヌエバレプブリカーノスを自国のカトリシズムとスペイン的伝統に固執し19世紀のロサス Juan Manuel de Rosas による独裁を理想視する復古主義者とし、その1930年クーデターへの参与や反ペロン姿勢を大衆蔑視によるものと解釈して、「ポピュリスト・ナショナリスト」のフォルハとは対照的な、「エリートイスト・ナショナリスト」と位置づけている¹⁰⁾。この見解をとる研究者の間では、ヌエバレプブリカーノスは権威や秩序を重視するその性向ゆえに、枢軸に好感を寄せたと考えられてきた¹¹⁾。その一方、ヌエバレプブリカーノスが1942年に解放党 Partido Libertador を結成し地方議会選挙に臨んだことを指摘し、その議会制度の枠内での穏健な改革姿勢や「現実主義的」対応を強調して、このグループのファシズム色と同時にエリートイスト傾向をも否定する研究者もいる¹²⁾。そうした少数派の研究者によれば、ヌエバレプブリカーノスは大战時、反帝国主義に基づいて大戦不関与の主張を展開したという¹³⁾。

しかし、こうしたヌエバレプブリカーノスの中立主義に関する見解は、いずれも実証的に裏付けられたものとは言い難い。ほとんどの研究は、大战時の彼らの言説を直接引用しておらず、擬似ナチ団体ないしフォルハの中立主義からの類推に頼った感が無きにしも有らずなのである。さらに言えば、そうした類推解釈の基となった上記の二大説自体、中立主義におい

て喚起されたアルゼンチン・ネイションへの帰属意識があまり分析されていない点で問題があるようにも思われる。換言すれば、これまでの研究は、中立主義をアルゼンチン・ナショナリズムの発露と位置づけながらも、この主張において想定されたアルゼンチン・ネイション像に些か無頓着であったように思われるのである。

ヌエバレプブリカーノスが1940年代前半に発刊した二つの週刊誌 *Nuevo Orden*, *La Voz del Plata* で、イラススタは大戦問題を執筆担当した。小稿では、主としてこれらの論説に依拠し、彼が代弁したこのグループの中立主義とそのアルゼンチン・ネイション観を見ていきたい。

1 第二次世界大戦前のイラススタ

イラススタは、1899年7月23日にエントレリオス州グアレグアイチュの中規模牧場主の家庭に生まれた。父方は植民地時代にバスクから移住したクリオージョの家系であるが、母はドイツ系移民の娘であった。当時の地方有産階級の子弟が大抵そうしたように、彼も初等教育を地元で受けた後、ブエノスアイレス市、ラプラタ市で中学・高校生活を送り、首都の国立大学法学部を中退して1923年、欧州に旅立つ。オックスフォード大学やローマ大学で文学、哲学を学び、1927年に帰国して *La Nueva República* を創刊、以後1982年5月6日に没するまで政治、経済、歴史、文学など幅広い分野で評論活動を続けた¹⁴⁾。

イラススタの第二次大戦時の主張を考察するのに、彼のヌエバレプブリカーノとしての履歴は無視できない。以下では、大戦前の約十年間のアルゼンチン¹⁵⁾におけるイラススタの言動を簡単に紹介しておく。

(1) 反イリゴージェン・キャンペーン

La Nueva República (以下、引用においては *NR* と略す) は、1928年4月の大統領選で急進党候補イリゴージェン Hipólito Yrigoyen の再選を阻止すべく前年12月に創刊され、これが失敗に終わった後も反イリゴージェン・キャンペーンを展開した。

選挙を公正化し労働法を制定するなど、大地主層の牛耳る寡頭支配体制の改革に熱心であった同大統領は、急進党の主要基盤である中間層を中心に広範な支持を得ていた。しかし、ヌエバレプブリカーノスは、こうした政策を社会主義革命につながるものと非難し、1929年3月には *La Nueva República* を休刊して、ウリブル José F. Uriburu 将軍を首謀者とする軍事決起の準備に奔走し、翌年9月6日のクーデター後には、男子普通選挙に基づく従来の代議制を職業別代表制に改革するよう提案した (NR, núm. 61, pp.1-4)。

イラススタはクーデター前、欧州に渡航しており、彼が決起計画および体制改革案にどの程度関与していたのかは不明である。しかし、1930年末に帰国後、『『消費的』、『奢嗜的』な労働階級』からの8時間労働、最低賃金の設定といった「扇動的」で「亡国を企む」要求に応じる衆愚政治と、イリゴージェンの施政を酷評している (NR, núm. 122, p.1; núm. 125, p.1) ことから、彼もまた反急進党政権、反大衆の立場に立っていたと推察できる。

(2) オリガルキア批判と修正主義的歴史観

ウリブル政権は軍内外で支持を得られず、1931年11月に民政移管選挙を実施する。ヌエバレプブリカーノスは同選挙時 *La Nueva República* を廃刊し、各自、老舗の大新聞や雑誌に寄稿先を求めた。イラススタも全国日刊紙 *La Nación* 他各紙に論説を掲載したが、特に1933年5月の英ア協定締結以降、自国の19世紀史に関して数多くの評論を残している¹⁶⁾。

「ロカ協定」と呼ばれる同協定は、英連邦が世界恐慌後のブロック経済化の波を受けて1932年8月に調印したオタワ協定を契機に締結されたものである。当時、主要輸出品である冷凍牛肉の9割以上を英国に出荷していたアルゼンチンは、連邦内特惠関税を定めたオタワ協定によって、この既得市場喪失の危機に直面することになったのである。民政移管選挙で発足したフスト Agustín P. Justo 政権の下、副大統領ロカ Julio A. Roca を团长としてロンドンに派遣された使節団は、自国畜産品の対英輸出枠の確保を

最優先し、関税の引き下げや英国資本の特恵待遇など英国から出された条件をほぼ全面的に受諾する。

イラススタが兄ロドルフォと共著で『アルゼンチンと英国帝国主義』を発表したのは、このロカ協定締結の翌年のことである。同書において、イラススタは、自国使節団の軟弱な対英交渉姿勢の原因を「オリガルキア (oligarquía, 寡頭支配層)」の心性に求め、その醸成過程について次のような見解を示した。

彼によれば、かかる心性の萌芽は、1816年の独立後、州自治を望む連邦派と争った中央集権派に見出せるという。中央集権派は国内統一を急ぐあまり、連邦派の奮闘によって優勢にあった対ブラジル戦を終結させ、旧ラプラタ副王領内のバンダ・オリエンタル地方（現在のウルグアイ）を割譲してしまう。こうした「自己の大義のための闘争を放棄するくらいなら、不名誉と祖国の分断を選択するという頑迷さ」は、19世紀半ばに内戦が中央集権派の勝利に終わった後、彼らを中核に形成されたオリガルキアに継承されていく。オリガルキアはその後、英国から資本を誘致してその利益に与り、「ネーションの主権と尊厳を傷つけても、英国帝国主義に恒久的に奉仕する」心性を培っていったというのである¹⁷⁾。

『アルゼンチンと英国帝国主義』は、1931年の民政移管選挙前後におけるイラススタの言説の変化を象徴する書と言えよう。一つは、攻撃対象の変化である。かつて労働階級を嫌悪しイリゴージェン政権の大衆政治を「亡国」的と批判した彼は、オリガルキアを「売国奴」として非難し始めた。これは、ロカ協定を契機とした彼自身の階級意識の変化に原因が求められよう。同協定では対英冷凍牛肉輸出総量のうち国内資本の冷凍工場に最大15パーセントという割当上限が課せられ、工場増設を企図していた中小牧場主層に幻滅を与えた¹⁸⁾。比較的裕福な牧場主の家庭に生まれ育ち、それまで支配階級への帰属意識を有していたイラススタも、外国資本の利益確保のために出身層の利益が切り捨てられる現実を前に、支配階級からの疎外感を抱いたと考えられる。

もう一つの変化は、評論対象に関するものである。彼はその後、現状理解の鍵を過去に求めて歴史研究に没入した。連邦派の指導者であったロサスこそ、安定的な独裁体制を確立し英仏軍のラプラタ河封鎖を撃退した国民的英雄であると賞賛し、この人物に「野蛮」で「血生臭い」イメージを固着させてきたとオリガルキアを批判する点において、イラススタのアルゼンチン史評論はほぼ一貫している¹⁹⁾。イラススタは、1930年代の「修正主義史観」および「ロシスモ rosismo」と呼ばれる歴史思潮の代表的論者であり、ヌエバレプブリカーノスを中心となって1938年に設立したロサス歴史研究所 Instituto Histórico de Juan Manuel de Rosas は、この新しい歴史観の発信拠点となったのである。

(3) フォルハとの交友

ところで、ロカ協定に憤激したのはイラススタ兄弟だけではない。フォルハもまた、その機関誌で、同協定に象徴される自国支配層の対英従属姿勢を激しく糾弾した²⁰⁾。上述したように、フォルハとヌエバレプブリカーノスの思想は対置されることが多いが、少なくとも民政移管後の約十年間においては、両者は互いに敬意を払い影響を及ぼし合う関係にあったと言える。特に、フォルハの理論的支柱であったスカラブリーニ＝オルティス Raúl Scalabrini Ortiz (以下、スカラブリーニと略称する) は、上記のイラススタ兄弟の書を絶賛し (Señales, núm. 26, p.3, 6), イラススタも、スカラブリーニの『アルゼンチン鉄道史』²¹⁾を高く評価している (Nuevo Orden, núm. 21, p.3)。

第二次大戦勃発後、スカラブリーニの創刊した日刊紙 *Reconquista* の編集にヌエバレプブリカーノスのメンバーが参画したことも、1930年代に培われた両グループ間の友好関係を無視しては説明できないのである。

2 欧州覇権攻防戦とアルゼンチンの解放

(1) アルゼンチンの中立宣言と言論統制²²⁾

1939年9月、欧州で大戦が勃発した直後、アルゼンチンのオルティス

Roberto M. Ortiz 大統領は中立を宣言し、交戦諸国に対して公平を期すため、いずれの交戦国の政治宣伝も禁じる言論統制を敷く。前年2月の大統領改選で発足した同政権自体、ポーランドの駐ア大使を承認し続けるなど反独姿勢を示すこともあったが、基本的には不偏中立を旨とし、大新聞各紙も当初は戦況のみを報道した。しかし、擬似ナチ団体による非合法的な親独宣伝は止まず、大新聞も英仏政府首脳への反動的な声明を頻繁に掲載し、民主主義陣営支援を示唆するようになっていく。当時のアルゼンチン世論は総じて英仏に同情的であり、その意味で大新聞の報道は政府の暗黙の了解の下に世論を反映するものであった²³⁾が、結果として、擬似ナチ団体の機関誌と共に言論統制を有名無実化し、不偏中立の建て前に忠実な人々から発言の場を奪うことになったのである。

1939年11月、スカラブリーニが個人資金によって *Reconquista* を創刊したのも、発言の場を求めたものと考えられる。彼は、同紙において、「ナチズム、ファシズムに断固反対する」(*Reconquista*, núm. 2, p.1) と同時に、アルゼンチンを搾取する「英国企業の横暴に断固反対する」(*Reconquista*, núm. 6, p.1) として、自国の大戦不関与を主張した。ヌエバレブプリカーノスも、民主主義者を気取って英国支援を正当化する大新聞の論調に嫌悪感を示すスカラブリーニに共鳴し (Irazusta, R., *Reconquista*, núm. 1, p.7), 同紙の編集に協力した²⁴⁾。

(2) 独軍大攻勢：世界覇権システムの転換

Reconquista が資金難から1939年12月末に廃刊となった後、ヌエバレブプリカーノスは、十年ぶりに独自の雑誌を創刊する。1940年7月18日、*Nuevo Orden* (以下、引用においては *NO* と略す) 第1号が刊行された。

イラススタは、同誌において、今回の大戦を英国に対するドイツの二度目の挑戦とし (*NO*, núm. 29, p.5), 両国の求める覇権について次のように論じた。英国は、「神に見捨てられ永罪に処せられるべく定められた外国人と救済を約束された英国人とに人類を二分するカルバン派の心性」に依拠し、強大な海軍力を駆使して五大大陸に跨る『優等な』北欧の金髪人に

よる『劣等』人種に対する搾取システム」を確立した (NO, núm. 43, p.5; núm. 46, p.3)。ナチスの反ユダヤ主義も選民意識に基づく人種差別である (Ibid.) が、「手の届く限りの領土を獲得し、人口を増大させ、勢力拡大に必要な物質的資源を入手することは、国家の義務であり」(NO, núm. 24, p.6), その意味で、ドイツの「生存圏」主張は「現実主義的」要求だという (NO, núm. 44, p.3)。

過去の戦争では英海軍による大陸封鎖の前に挑戦国は無力であったが、今回は違くと、イラススタは力説する。英国が空爆によって本土防衛に専心せざるを得なくなったことは、軍事上の常識を打ち破る「コペルニクス的転換」(NO, núm. 6, p.1)である。他方、陸軍国であるドイツは海外領土を求めようとはしない (NO, núm. 16, p.4; núm. 29, p.5; núm. 47, p.1)。それゆえに、独軍の大攻勢は大英帝国の「メトロポリ」を弱体化させ、その「衛星となってきた我々が米州を解放する」。カトリシズムに依拠し「万人救済を追求したスペイン帝国」の末裔にもかかわらず、大英帝国に搾取されてきた新大陸の「ヒスパニック・カトリック共同体」は、今まさに解放の好機を迎えたというのである (NO, núm. 18, p.5)。

その米州では、7月下旬にハバナで外相会議が開かれ、米国の指導によって、独軍に降伏した仏蘭両国の新大陸領の米州共同統治を定めた協定や米州共同防衛を唱ったハバナ宣言が採択された。しかし、イラススタにとって、米国は決して「我々が」米州の構成員ではない。米国が「母国」を支援するのはともかく、「我々には、これまでの屈辱を忘却するほどの犠牲精神はない」(NO, núm. 1, p.3; núm. 42, p.3)。「米州平和を脅かす暗黙の危険は、我々が奴隷としてこの愚かで犯罪的な殺戮に引き摺り込まれることにある」。「こうした危険は、そもそもハバナ会議で、米国のみの問題を我々の問題とすり替える提案に我々が譲歩したことに由来する」(NO, núm. 9, p.1) というのである。

(3) アルゼンチンの解放

「我々は、この願ってもない好機を利用することで、アルゼンチン人と

しての自由意志を示し、自国解放事業を完遂させることができる」(NO, núm. 6, p.1)と述べているように、イラススタにとって、「我らが米州の解放好機」は、なによりアルゼンチンのチャンスの意味した。

しかし、この時期のアルゼンチンにおいて、こうした認識を抱く者はごく少数だったようである。彼は、「街頭で人々が同胞に、自由や民主主義、ドイツの占領に屈した諸国民の尊厳のために欧州の戦場に向かえと説くグロテスクな光景」(NO, núm. 25, p.1)に憤慨し、こうした光景の演出者として大新聞を批判した(NO, núm. 7, p.3)。その一方で、「我が国の問題を解決するために、異国の処方箋を採用することには反対である」(NO, núm. 8, p.5)として、独軍の攻勢に勢いを得てアルゼンチンもファシズム体制に倣えと喧伝する擬似ナチ団体にも度々釘を刺している(NO, núm. 29, p.5; núm. 32, p.4; núm. 49, p.4)。

交戦国に政治体制のモデルを求めて論じることは時宜に合わないというのが、イラススタの見解である。彼によれば、長期間を要すアルゼンチンの内政改革は対外的従属解消後の課題であって「今は政治体制について論じる時ではな」く(NO, núm. 5, p.1)、その意味で、政府による言論統制は「良策」だという(NO, núm. 6, p.1)。1940年の後半から1941年にかけて、彼が自国の政局に言及していないのも、政治体制論を自制したものと考えられよう。

実はこの頃、オルティスの政権指導力は低下の一途を辿っていた。同大統領は病臥し、副大統領のカステイージョ Ramón S. Castillo に1940年7月、国政を託さざるを得なくなったからである。さらに8月、陸軍用地買収に絡む不正事件が発覚し、9月には内閣改造が行われた。首班が誰なのか掴みにくい当時のアルゼンチン政府に対して、イラススタは、言論統制以外期待できないと考えたのではなかろうか。

しかしながら、同時期の彼の論説からは、好機を活用するための、より積極的なアルゼンチン経済改革案も読みとれる。その一つは、「国内資本による工業化」である。イラススタは、次のように述べている。

英国が「アルゼンチン人には経済を自力で組織する能力がない」という迷信を編み出し、「英国の代理人となった人々」がこれを同胞に信じ込ませてきたため、「平均的なアルゼンチン人は、国内の未投資分野に資本を投下して産業を育成することなど思いつかないようである」(NO, núm. 21, p.3)。しかし、アルゼンチン人は、「決して生来の無能ではなく」、「アングロサクソンに優るとも劣らず、世俗生活の諸問題を処理する能力がある。実際、クリオージョの小資本家たちは、官製の経済教育に害されなかった」。独立以来、塩漬け肉加工業や鉄道に投資した「クリオージョの小資本家たち」は19世紀後半以降、外資優遇政策によって幾度となく苦汁を飲まされてきたが、屈することなく、「ここのところ、その投資先を多様化させてもいる」(Ibid.)。

イラススタによれば、英国とオリガルキアによって「永遠の農牧国に固定されたアルゼンチン」(NO, núm. 47, p. 1)において、その官製の劣等感教育に洗脳されなかった「クリオージョの小資本家たち」こそ、自国工業化の牽引力だというのである。この点で、彼は「官」に絶望し専ら「民」に期待を懸けていたように思われる。

しかし、彼のもう一つの経済改革案、「ラプラタ経済圏の再建」は、政府のイニシアチブ抜きには実現し難いものであり、イラススタがこれを提案し始めたのも、1941年1月、オルティスの意を受けて入閣していたピネド Federico Pinedo 蔵相とロカ外相が辞任したことで実権を掌握したカステージョに期待を寄せたものと考えられる²⁵⁾。同月、新外相に任命されたルイス＝ギニャス Enrique Ruiz Guiñas の音頭でラプラタ経済会議が開催され、パラグアイ、ウルグアイ、オブザーバーとしてボリビア、ブラジルが参集し、大戦による対欧貿易の減少から各国が抱えた輸出品余剰を域内貿易で相殺することが話し合われた。

大戦の長期化が予想され始めたこの頃より、イラススタもこうした貿易の推進を訴え始めているのである。「大陸間貿易を断絶し国内取引および近隣諸国との貿易を促進して経済体制を根本的に改革するのに、長期戦は

我々にとって有利なものとなる」(NO, núm. 37, p.5)。さらに、彼は、「豊富な原材料資源、工業力、文明生活の精神的諸要素の備わった地域毎に、独立を希求しそれに相応する偉大な人民が組織していた経済的自足システム」の復興を説いた。アルゼンチンが対英従属を打破するには、ラプラタ副王領域で維持されていた「経済的自足システム」を再建しなければならないというのである (NO, núm. 38, p.4)。

3 「恵まれたアルゼンチン」

(1) 独ソ開戦：大英帝国の衰退

1941年6月の独ソ開戦後、イラスタは、「大敗北を喫するか、戦前よりも無秩序な戦後に苛まれるか」という「英国のジレンマ」(NO, núm. 73, p.3)に関心を示す。彼によれば、英国がソ連と同盟を結んだのは、目前の対独戦で敗北を回避するために、将来の欧州共産化の危険を冒した選択だという。かかる選択肢しか残されていないこと自体、英国が昔日の勢威を喪失した証左であり、欧州の覇権は今後独ソ間で争われるというのが、彼の見解である (NO, núm. 51, p.4)。

旧大陸のナチ化か共産化かという二者択一において、イラスタが前者を好ましいと考えたことは間違いない。古典的かつ限定的な領土要求であるナチスの生存圏主張と異なり、「個々の政府に従う労働者を喪失させる」ソ連共産主義は「危険」だという (Ibid.)。しかし、その一方で、彼は「戦闘を長期化させたソ連」に敬意を表してもいる。「ロシアの健闘」は、その「抵抗力」、「軍事的効率性」が「他のドイツ敵対諸国に優る」証左だということである (NO, núm. 56, p.5)。

ただし、イラスタが欧州諸国のなかで最大の賛辞を寄せたのは、反共姿勢を示して「大戦に片足を突っ込みつつも、もう一方の足で踏みとどまっている」スペインであった。同国を大戦中立へと導いた「フランコ Francisco Franco Bahamonde」の決断には、かつて我が人種 raza が世界を制覇していた絶頂期と同様、ヒスパニックの熱い心を揺さぶるりしさが

あり」、「選択の自由を確保している同国に、拍手喝采せずにはいられない」というのである (NO, núm. 54, p.2)。

(2) 米国帝国主義と「恵まれたアルゼンチン」

欧州で独ソ戦が展開されている頃、イラススタは、「強大化する米国」に不安を示すようになる。パックス・ブリタニカは終焉したが、米国は独軍攻撃に対する「予防措置」として英海軍施設を継承しつつあり、パックス・アメリカナの戦後世界が構築されたとき、「我らが米州」はその帝国版図に組み込まれてしまうのではないかという不安である (NO, núm. 53, p.4; núm. 58, p.3)。

しかし、「ローズベルトが西半球防衛と呼ぶ政策は、米国人による世界支配事業に他ならない」(NO, núm. 53, p.4)として米国帝国主義に警戒を呼びかける彼の声は、国内で一向に反響を呼ばなかった。6月、下院に設置された非アルゼンチン調査委員会 Comisión Investigadora Anti-Argentina は、国務省作成のブラック・リストに基づいてドイツと緊密な関係にある在ア企業を摘発し、大新聞は連日その調査内容を掲載してナチスの政治侵略に警鐘を鳴らしていた。カスティージョ政権は議会と一線を画したが、それでもこの時期、他のラテンアメリカ諸国政府と同様、米国からの援助を期待して、1941年5月より対米戦略物資交渉、8月より武器貸与交渉に入り、10月には米ア貿易協定を締結する。

イラススタは、非アルゼンチン調査委員会の活動を「米国の人種差別的干渉に甘んじる」違憲行為と批判し (NO, núm. 55, p.1)、「ヤンキーの外交包囲網に恐愕する政府」(NO, núm. 62, p.5)に苛立った。艦隊戦から航空戦の時代に入り、かつ、爆撃機が現下の技術水準で北半球から南米最南端に飛来し得るほどの航続距離を持たない今、アルゼンチンは、勞せずして海外からのあらゆる攻撃に対する非脆弱さを得た、「最も恵まれた」国である (NO, núm. 53, p.4)。それゆえ、「こうした特権を剥ぎとり、この地域を一系列の勢威に屈せしめようとする」(Ibid.)米国の策略的な武器の大盤振舞に応じることなく、一刻も早く「兵器の自力製造・修繕可能

な」国防体制を整備することこそ急務であり、これを「遅滞させたり、他国との武器交渉に臨んでそうした産業の創出を阻むことは、大逆罪である」というのである（NO, núm. 62, p.5）。

彼は、「アルゼンチン人による、アルゼンチンの配慮に基づく、あくまでアルゼンチンのための、アルゼンチンの解決策」を説いた。新規外国借款を全面的に禁止して外国資本を徹底的に排除し、工業債を発行し国内資本を結集して「経済的自立の基盤となる武器製造業」をはじめとする工業化に着手すると同時に、「かつてのブエノスアイレス副王領およびチリ、場合によってはペルーも加えて南部関税同盟を形成する」という、この「アルゼンチンの解決策」（*Ibid.*）は、彼がそれまで経済改革の方策として掲げてきた、国内資本による工業化とラプラタ経済圏の再建をより具体的に示したものと言えよう。

（3）日米開戦後のアルゼンチンの中立「無策」

1941年12月、日本軍の真珠湾攻撃によって、太平洋戦争が始まった。米州では9カ国が連合国側から参戦し、3カ国が宣戦布告をしないまでも枢軸諸国との国交を断絶する。アルゼンチンは、その他の米州諸国と共に、新大陸の参戦各国に対して非交戦を宣言した。

しかし、カスティージョは、この非交戦宣言で、太平洋上における日本軍の攻撃は米州大陸に対する侵略行動ではないと言明し、戒厳令を発令して国内の親連合国ムードを封じる。また、ルイス＝ギニャス外相は、1942年1月中旬にリオデジャネイロで米州外相会議が開催される直前、パラグアイ、ボリビア、ペルー、チリの外相をブエノスアイレスに集め、米国代表が提案するであろう枢軸断交決議に反対するよう呼びかける。この事前工作は失敗し、リオデジャネイロでルイス＝ギニャスは孤立するが、カスティージョの訓令を受けて強硬姿勢を貫き、米国に決議要請を取り下げさせ、対枢軸断交を勧告の形にさせた。

米国に譲歩させたことで、カスティージョは「アルゼンチンの主権と平和の擁護者」と自画自賛したが²⁶⁾、こうした姿勢は国務省からの圧力――

輸出規制の強化や武器貸与適用除外および戦略物資交渉の中止など——を招き、かえってアルゼンチン国内の危機感を煽ることになる。ブラジルをライバル視する軍部は、米国の膨大な援助によるこの隣国の軍拡を拱手傍観せざるを得ない状況に焦燥感を募らせていった。また、米ア関係の悪化はラプラタ地域貿易にも悪影響を及ぼす。米国からの援助を必要とする近隣諸国は、アルゼンチン主導の地域経済振興に熱意を示さなくなったからである。さらに、米国の貿易規制によって、アルゼンチンは燃料・工業製品不足に悩まされることになった。1942年8月のブラジル参戦直後、下院は対枢軸断交決議を可決し、軍部でも対米協調を求める声が一段と高まる。しかし、カステージョは、議会に対して「対外政策の決定は行政府の権限である」と強弁する一方、軍に対してはドイツと武器秘密交渉を行うことで慰撫し、対枢軸断交を拒絶し続けた。

日米開戦後、イラススタは、上述したカステージョによる非交戦宣言に満足を示して (*NO*, núm. 75, p.4) 政府の外交姿勢を支持し、在野の親連合論を批判している。*Nuevo Orden* は1942年5月21日付の第95号で廃刊となり6月11日、*La Voz del Plata* (以下、引用においては *VP* と略す) が発刊されたが、彼の「アルゼンチン知識人の現実との乖離」(*NO*, núm. 95, p.5)や「ヤンキーかぶれのアルゼンチン・ジャーナリズム」(*VP*, núm. 11, p.3)を弾劾する姿勢に変わりはない。

しかし、アルゼンチンの経済状況が悪化するにつれ、彼の批判の鋒先は、「手遅れになるまで大戦に起因する諸問題に真剣に取り組もうとしなかった政府」にも向けられていった。イラススタは、貯蔵施設や輸送燃料、国外穀物市場の不足から収穫物が野晒しにされていることに憤慨し、「農業者に劣悪な補償をもって報い、彼らが他業種に転換するままに放置し」、「農業者を犠牲にしつつ」、「国際貿易の平常化を待っている」政府の「無策」を糾弾した (*NO*, núm. 93, p.3)。

4 「現実主義的」対米和解

(1) 解放党結成と1943年クーデター

カステージョ政権の無為中立に苛立つヌエバレプブリカーノスは、より直接的な政治的影響力を求め、1942年10月、ロドルフォ・イラスタを党首として解放党を結成し、翌年3月のエントレリオス州議会選挙に候補者を立てた。このとき同党は当選者を出すことはできなかったが、それでも社会党 Partido Socialista より多い約2,000票を獲得した²⁷⁾。

この選挙結果について、イラスタは次のように述べている。1930年代以降、ナショナリズムという「流行現象は、世論を魅了し続け、合法的に選挙民に接近することで、効果的で直接的な政治的影響力を持つ運動となった」。しかし、この運動が「本や新聞から出ることなく」、「固有の組織を持たないままならば、今以上のいかなる成果も望み得ない」。エントレリオス州での解放党の「勝利」は、ナショナリストが大同団結する第一歩であって、「我々にとって、今は収穫の時期ではなく種蒔きの時期である」(VP, núm. 41, p.1)。

ところが、「収穫期」は意外に早く訪れた。次に挙げるイラスタの論説は、ヌエバレプブリカーノスが軍の体制転覆計画を事前に察知しこれに協力したことを暗示している。「我々は今、我々と共通の立場をとる唯一の指導組織に参列している」。この「指導組織」は、「これまで担ってきた、体制の道具という悲しい役割を放棄し」、「体制と徹底的に対決することを決意したようである」。「さほど遠からぬ将来、すばらしい収穫がもたらされるであろう」(VP, núm. 45, p.1)。

「唯一の指導組織」は、GOU (統一将校団, Grupo de Oficiales Unidos の略)を指すと考えられる。1943年3月に陸軍の佐官を中心に結成されたこの秘密結社は、カステージョが次期大統領候補に参戦派の保守政治家を指名したことに憤り、汚職にまみれた文民政権に不満を募らせていた海軍将校団の協力を得て6月4日、クーデターの挙に出る。

しかし、イラスタはクーデター直後、「我々の努力は半分報われ、半

分無駄に終わった」と述べている (VP, núm. 48, p.3)。「現臨時政権を継承する大規模な革命政党の組織化が間に合わなければ、我が国は、権威主義体制を無期限に続けるか」、「再び軍事クーデターを誘発する不安定な憲政に戻るしかなくなる」(Ibid.) というのである。

(2) 「現実主義的」対米和解

このクーデターは、計画的というより、多分に突発的なものだったと言えよう。陸海軍将校の間でも新政権の構成や政策について合意が形成されていなかったらしく、決起当日に大統領に就任したラウソン Arturo Rawson 将軍は、組閣に失敗し翌日辞任する。彼の後を受けて大統領に就任したラミレス Pedro P. Ramírez 将軍の下でも、軍事政権は、対ブラジル軍力不均衡の是正手段について意見が分かれた。カステージョ政権期に試みられたものの沙汰止みとなっていたドイツからの武器購入計画の再開を目指す GOU 対し、海軍では米国の武器貸与に望みをかける将校が多数を占めていたのである。

8月5日に米国国務長官ハル Cordell Hull に書簡を送り、対枢軸断交の意思を示したストルーニ Segundo Storni 外相は、後者に属する提督であった。ストルーニが同書簡送付の一カ月前、国内に向けて米州共同防衛の重要性を説いて対枢軸断交を匂わせ、「これを歓迎する声が湧き上がった」とき、イラススタも、「その是認理由は大多数のジャーナリストのそれとは正反対のものであるが、彼らの大合唱に和して外相談話を歓迎した」という (VP, núm. 52, p.1)。「その是認理由」として、彼は、「文民政権の国際政策の失敗」ゆえに軍事政権には他の選択肢が残されていないことを挙げている。「米州諸国、特に南部諸国」は、米国との相互援助の「約束から免れていた頃、アルゼンチンを中核として結集しようという我々の言葉を待ち望んでいた」し、「近隣諸国と緊密な関係を持続できていれば、我々も孤立せず済んだかもしれない」(Ibid.) が、今となっては孤立解消こそ急務だというのである。いずれにせよ、イラススタは、「しばしば交戦陣営の一方に好意的な声明を発表した前政権」とは対照的

な、軍事政権の「不偏性」、「現実主義的な判断」(Ibid.)に全幅の信頼を寄せ、中立主義を撤回した。

しかし、ストルーニの懇請がハルによって拒否されると、GOUは両者の往復書簡を報道機関にリークし、アルゼンチン国家の尊厳を傷つけたとして外相弾劾の世論をかき立てた。イラスタにとっては、往復書簡の内容よりも、軍事政権内の対立を晒すことになった事件の顛末の方がショックだったようである。彼は9月9日の同外相辞任後、*La Voz del Plata*にかつて地方日刊紙*La Capital*に寄稿した論説を再掲載した。「特権に対して保守的で警察力に依存せざるを得ない不人気な独裁は、最もグロテスクな処方箋の一つ」であり、「非常時にのみ適用されるべき暫定的手段である」と述べたこの論説(VP, núm. 60, p.3)をこの時期に再掲載したことに、彼の軍事政権に対する失望が示されている。

(3) 米ソ冷戦予想とアルゼンチンの中立成果

イラスタが中立主義を撤回したのは、戦況の変化を敏感に感知したことにもよろう。1943年2月のスターリングラードでの独軍降伏以降、彼は「戦後の連合国の困難」を論じるようになる。「この不経済極まりない戦争から確実な利益を上げる方法は、敗戦国のみならず勝利を共にする友邦国すらも破滅させることである」。米国は「英国からの富の収奪を国際的に合法化する以外、その損害を相殺する方法はない」。ソ連は「このまま同盟国に忠誠を誓い単独で対独戦を戦い抜けば、失血死することになろう。かかる経験をしたロシア人が戦後、世界平和体制を議論する席で、寛容さを示すはずがない」(VP, núm. 38, p.3)。

イラスタが「英米をいずれ裏切るソ連」に同情的(Ibid.; VP, núm. 42, p.1)なのは、米国の世界制覇を阻む唯一の勢力と期待してのことのようである。彼は、「ロシアが戦後平和構想に介入する」場合、米国も「ロシア人が見放す諸地域に限って、地域的な支配体制を敷くだけになるだろう」と述べている(núm. 44, p.3)。

1943年後半、イラスタが自国について書いた論説は一本しかない。こ

の論説で、彼は、当時のアルゼンチンの工業生産と輸出の健調を喜びながらも、「現在の栄光が流れ星の儚い光芒となってしまう」(VP, núm. 66, p.1) ことに危惧を示し、次のように述べている。「米国がその経済ブロックを存続させてきたのに対し、我が国はそうでない。なぜか？ それは、かの地における政治勢力が常に保護主義を心掛けてきた」のに対し、アルゼンチンでは、「知識人」と「国家」が「外国の影響下に屈し」、「国民経済における自然発生的な発展衝動を排斥したために、各地で勃興した工業が死滅したからである」。「現在の繁栄がどれほど確かなものに見えようとも、政治が国内工業を利するように介入しなければ、再び消滅してしまうだろう」(Ibid.)。

アルゼンチンの対独武器交渉やボリビアの軍事クーデター(1943年12月)関与の情報を得た米国からその公表を脅され、1944年1月26日、ラミレスは対日独断交に踏み切る。しかし、これを不満とする将校たちによって同大統領は失脚させられ、替わって軍事政権のトップに座ったファレル Edelmino Farrell の下で、アルゼンチンの対米関係はさらに悪化していく。他のラテンアメリカ諸国の仲裁によって、アルゼンチンが米州会議に復帰し対日独宣戦布告を行ったのは、1945年3月27日のことである。

イラススタは、*La Voz del Plata* が1943年12月16日付の第67号をもって廃刊となって以降、1940年代においては同時代について単独署名論説を残しておらず²⁸⁾、その後の軍事政権に対する彼およびヌエバレプブリカーノスの見解は、1945年12月6日にロドルフォ・イラススタを筆頭に連名で発表した「解放党全国委員会声明」から読み取る他ない。彼らは、この声明で、軍事政権の反米姿勢を「大陸団結に対する破城槌」として批判している。英国系鉄道の運賃値上げを認可し、諸外国からのバーター貿易案を拒絶し国内消費を削って対英牛肉輸出量を確保した「革命政権」は、自国を英国の食糧供給国とし工業化を阻止した保守政権と何ら変わらず、その「米州において傲慢さを示し英国に屈従する政策は、我々を世界中から孤立させた」という。それゆえ、民政移管選挙で軍事政権公認候補であるべ

ロンが当選すれば、「より破滅的なことになる」と、同声明は結んでいる²⁹⁾。

おわりに

中立主義者の交戦諸国に対する親愛・反感に注目すれば、「はじめに」で紹介した既存の有力な中立主義解釈は、次のように言い換えられよう。すなわち、一つは、擬似ナチ団体をはじめとする「親独ゆえに反英米」的なアルゼンチン・ファシストが中立主義を主張したという説であり、もう一つは、フォルハのように反帝国主義の立場から「反独かつ反英米」的な中立主義者もいたとする説である³⁰⁾。イラススタが代弁したヌエバレプブリカーノスの中立主義は、これら二通りの解釈から類推されてきたわけだが、ここでは、小稿での考察結果を基に、かかる類推解釈の是非を確かめておきたい。

まず第一に指摘されるのは、イラススタがアルゼンチンのファシスト体制化を喧伝する人々に対して批判的だったことである。このことは、ヌエバレプブリカーノスの中立主義が、少なくともファシズムに対する共感によって動機づけられた主張ではなかったことを示している。大戦を列強間の覇権闘争と位置づけてアルゼンチンの大戦不関与を訴えたイラススタの主張は、むしろフォルハのスカラブリーニの議論に近い。しかし、スカラブリーニがあらゆる列強の侵略・干渉に等しく反対したのに対し、イラススタは、大英帝国の世界覇権を覆すナチス・ドイツの欧州制覇を歓迎し、米国帝国主義を憂慮してソ連に期待を賭けた。これらのことから、ヌエバレプブリカーノスの中立主義は、厳密には擬似ナチ団体、フォルハのいずれの中立主義とも異なる、「反英ゆえに親独」的、「反米ゆえに親ソ」的でも形容すべき独特の主張だったと考えられる。

小稿は大戦期のイラススタの主張に焦点を当てたものであり、その分析結果をもってヌエバレプブリカーノス思想を総括することはできないが、ここでの考察がこれまで彼らに下されてきた評価に疑問を投げかけること

も確かである。たとえば、1943年クーデター前後のイラススタの論説はこのグループの軍事政権に対する日和見姿勢を示しており、彼らの議会政治に対する忠誠を強調することはかなりの無理がある。しかし、このグループを反動と断ずる評も首肯し難い。大英帝国の経済支配からの自国の「解放」を力説したイラススタの主張は、復古主義的強権主義というより反帝国主義として捉えるべきように思われるからである。

ただし、その反帝国主義は、解放されるべき「アルゼンチン・ネイション」の捉え方において、諸研究で取り上げられてきたフォルハの反帝国主義と異なっている。フォルハは、多種多様な移民の「消化」によって形成されたアルゼンチン「人民」³¹⁾に対する英国の経済支配に反対したと言われている³²⁾のに対して、ヌエバレプブリカーノスのイラススタは、アルゼンチンのナショナル・アイデンティティを「ヒスパニック・カトリック」に求めており、その反帝国主義の主張は「アングロサクソン・プロテスタント」に対する憎悪に彩られているからである。

彼のいう「ヒスパニック・カトリック」は、最広義において旧スペイン帝国領を網羅するが、より狭義にはヒスパニック米州であり、最狭義のそれはラプラタ副王領域を意味する。アルゼンチンはこの副王領域を本来の領土とし、カトリシズムに帰依したスペイン帝国のなかでも一大領域を占める大国であるはずである。にもかかわらず、国土を分断し大英帝国の「保護国」に墮落してしまったという憤りが、イラススタの反帝国主義の基底に流れている。

クリオージョの家系に生まれ育ちヒスパニック・カトリックたるアルゼンチン人であることを誇るがゆえに、彼は、英アの発展格差を前にして、エスニシティや宗派の違いによる両国民の能力差に思いを巡らせた。その意味では、英国とその「代理人」たるオリガルキアがアルゼンチン人に染み込ませた劣等感を慨嘆した彼自身、この劣等感に苛まれていたと考えられる。資本主義的企業家精神は、アングロサクソン・プロテスタントの専売特許なのか。アルゼンチンには工業発展可能性がなく、「永遠の農

牧国」に留まる他ないのか。こう問いかけ「アルゼンチン人は生来の無能ではない」と力説したイラスタの論説は、ナショナリストとしての彼の内面的葛藤を示唆して興味深い。筆者は、自国に蔓延する対英劣等感を鋭く認識し、彼自身のアイデンティティを賭けてこれを払拭しようとした点こそ、イラスタのナショナリズム思想を特徴づけるものではないかと考える。

註

- 1) Bárbero y Devoto (1983), p.10.
- 2) 米国では、1990年代に入ってから、依然としてこうした見解が有力である。たとえば、Rock (1993), pp.13, 94-101, Deutsch y Dolkart, eds. (1993), Introduction を参照のこと。
- 3) Bárbero y Devoto (1983), p.11. アルゼンチン・ナショナリズムの運動としての脆弱さと思想的影響力の大きさは、ナバロ=ヘラッシも指摘している。Navarro Gerassi (1969), p.15.
- 4) 中立主義者をファシストとみなす見解が有力となった経緯については、松下 (1987), 214-217ページを参照。この見解は、アルゼンチンでも一定の支持を得た。たとえば、Romero (1956), pp.229-231, 238 など。
- 5) 松下 (1987), 161-162ページ参照。
- 6) たとえば、Ramos (1958), Hernández Arregui (1960) など。
- 7) “Manifiesto de los Radicales Fuertes”, citado en Jauretche (1962), pp.63-64.
- 8) volante de FORJA de 1939, citado en *Ibid.*, pp.79-80.
- 9) たとえば、Navarro Gerassi (1969), pp.138-140, Falcoff (1970), pp.324-332, Galasso (1970), pp.291-343, Scenna (1972), pp.193-227, 松下 (1977), 25-34ページ, 今井 (1977), 126ページ, Buchrucker (1987), p.273 など。
- 10) Bárbero y Devoto (1983), p.11. ラモスやエルナンデス=アレギは、地方地主層の子弟から成るヌエバレプブリカーノスに対してフォルハが都市中間層出身者によって占められていたとし、こうした出自における差異に両グループの思想的差異の原因を求めている。Ramos (1958), pp.333-336, 376-377; Hernández Arregui (1960), pp.167-168.
- 11) Falcoff (1970), p.322; Buchrucker (1987), pp.150-154, 184-205.
- 12) スレータ=アルバレスによれば、ヌエバレプブリカーノスは、その名が示す通り、アルゼンチンの伝統をその憲法で唱われている共和制に求めた

- という。Zuleta Álvarez (1975), pp.219-223. また、セゴビアは、「政治が『情勢 *circunstancias*』を唯一の価値とし、それゆえに偶発的で流動的であること」を見抜いた「現実主義者」として、イラススタを評価している。Segovia (1993), pp.203-211.
- 13) Zuleta Álvarez (1975), pp.404-414.
 - 14) イラススタの経歴については、彼の回顧録 Irazusta (1975)を参照。
 - 15) 1930年代のアルゼンチン政治については、中川文雄・松下洋・遅野井茂雄 (1985), 332-345ページを参照のこと。
 - 16) Bohdziewicz (1988), pp.492-496.
 - 17) Irazusta, Rodolfo y Julio (1934), pp. 137-204.
 - 18) イラススタがかかる幻滅を共有していたことは、ロカ協定によるグアレグアイチュ冷凍社 Frigorífico Gualeguaychú 設立囁座に憤慨している (*Nuevo Orden*, núm. 19, p.1) ことから確認できる。
 - 19) Irazusta (1935), (1941).
 - 20) フォルハの反ロカ協定キャンペーンについては、ガラッソやセナの書が詳しい。Galasso (1970), pp.213-255; Scenna (1972), pp.77-156.
 - 21) Scalabrini Ortiz (1940).
 - 22) 第二次世界大戦時のアルゼンチンの中立外交、国内政治については、松下 (1987), 213-262ページおよび睦月 (1990)を参照のこと。
 - 23) Hilton (1966), pp.234-235.
 - 24) ただし、*Reconquista* にイラススタの署名論説はなく、この時期に欧州での大戦や自国の中立政策について彼がどのような見解を持っていたのか、正確なところは不明である。
 - 25) 1933年の英ア二国間協定の交渉者であったロカに対してイラススタが不信任感を抱いていたことは、『アルゼンチンと英国帝国主義』でも明らかであるが、彼はピネドについても、そのグアレグアイチュ冷凍社設立妨害を指弾している (*NO*, núm. 19, p.4)。
 - 26) “Mensaje anual del Dr. Castillo al Congreso Nacional del 28 de mayo de 1942”, citado en Potash (1969), p.166.
 - 27) Zuleta Álvarez (1975), p.501.
 - 28) Bohdziewicz (1988), p.506.
 - 29) “Manifiesto de la Comisión Nacional del Partido Libertador del 6 de diciembre de 1945”, citado en Irazusta (1956), pp.229-237.
 - 30) 松下は、「親独ゆえに反米的」だったと言われるカステイジョ政権、軍事政権の親英姿勢を綿密に論じている。松下 (1987), 237-257ページ。
 - 31) Scalabrini Ortiz (1931), pp.21-23.
 - 32) ただし、ロックも指摘しているように、スカラブリーニは英国人について

て「悪しき信仰ゆえの世界支配政策によって特徴づけられる敵」とも述べており、フォルハはエスニシティや宗派に拘泥しなかったという通説も今後再検討される必要があると思われる。Rock (1993), p.43.

参考文献

- Bárbero, María Ines y Devoto, Fernando
 1983 *Los nacionalistas, 1910-1930*. Buenos Aires: Centro Editor de América Latina.
- Bohdziewicz, Jorge G.
 1988 “Bibliografía del académico de número Dr. Julio Irazusta”. *Boletín de la Academia Nacional de la Historia*. vol. LXI. Buenos Aires.
- Buchrucker, Cristian
 1987 *Nacionalismo y peronismo: La Argentina en la crisis ideológica mundial, 1927-1955*. Buenos Aires: Editorial Sudamericana.
- Deutsch, Sandra McGee y Dolkart, Ronald H., eds.
 1993 *The Argentine Right: Its History and Intellectual Origins, 1910 to the Present*. Wilmington: Scholarly Resources Inc.
- Falcoff, Mark
 1970 “Argentine Nationalism on the Eve of Peron: Force of Radical Orientation of Young Argentina and Its Rivals”, Ph. D. dissertation, University of Princeton.
- Galasso, Norberto
 1970 *Vida de Scalabrini Ortiz*. Buenos Aires: Editorial Mar Dulce.
- Hernández Arregui, Juan José
 1960 *La formación de la conciencia nacional, 1930-1960* (3ªed., 1973). Buenos Aires: Editorial Plus Ultra.
- Hilton, Stanley
 1966 “Argentine Neutrality, September 1939-June 1940: A Re-Examination”. *The Americas* vol.22, no.3.
- 今井圭子
 1977 「アルゼンチンのナショナリズムに関する一考察——ペロン政権の経済政策を中心に——」(増田義郎編『ラテンアメリカのナショナリズム』アジア経済研究所)
- Irazusta, Julio
 1935 *Ensayo sobre Rosas: en el centenario de la suma del poder, 1835-1935*. Buenos Aires: Editorial Tor.
- 1941 *Vida política de Juan Manuel de Rosas a través de su correspondencia*,

- 1793-1835, tomo 1. Buenos Aires: Editorial Albatros.
- 1956 *Perón y la crisis argentina*. Buenos Aires: La Voz del Plata.
- 1975 *Memorias: Historia de un historiador a la fuerza*, Buenos Aires: Culturales Argentinas.
- Irazusta, Rodolfo y Julio
- 1934 *La argentina y el imperialismo británico: los eslabones de una cadena* (2^aed., 1982), Buenos Aires: Editorial Independencia.
- Jauretche, Arturo
- 1962 *F.O.R.J.A. y la década infame*. Buenos Aires: Editorial Coyoacán.
- 松下洋
- 1977 「FORJA：アルゼンチン民族主義運動の一軌跡——ペロニズムとの関連性をめぐって——(2)」(『アカデミア』第27号, 南山大学)
- 1987 『ペロニズム・権威主義と従属——ラテンアメリカの政治外交研究』有信堂
- 睦月規子
- 1990 「アルゼンチンチンの第二次世界大戦——中立政策と国内政治(1)(2)」(『広島法学』第14巻第1号, 同第2号)
- 中川文雄・松下洋・遅野井茂雄
- 1985 『ラテンアメリカ現代史Ⅱ——アンデス・ラプラタ地域』山川出版社
- Navarro Gerassi, Marysa
- 1969 *Los nacionalistas*. Buenos Aires: Editorial Jorge Alvarez.
- Potash, Robert
- 1969 *The Army and Politics in Argentina, 1928-1945*. Stanford: Stanford University Press.
- Ramos, Jorge Abelargo
- 1956 *Revolución y contrarrevolución en Argentina: las masas en nuestra historia*. Buenos Aires: Editorial Amerindia.
- Rock, David
- 1993 *Autoritarian Argentina: The Nationalist Movement, Its History and Its Impact*. Berkeley and Los Angeles: University of California Press, trans. por Ossona, Jorge Luis en 1993, *La Argentina Autoritaria: Los nacionalistas, su historia y su influencia en la vida pública*. Buenos Aires: Ariel.
- Romero, José Luis
- 1956 *Las ideas políticas en Argentina* (11^aed., 1992). México: Fondo de Cultura Económica.

Scalabrini Ortiz, Raúl

1931 *El hombre está solo y espera* (reimpresión 1991). Buenos Aires: Editorial Plus Ultra.

1940 *Historia de los ferrocarriles argentinos*. Buenos Aires: Editorial Reconquista.

Scenna, Miguel Angel

1972 *F.O.R.J.A.: Una aventura argentina de Yrigoyen a Perón* (3ªed., 1983). Buenos Aires: Editorial de Bergrano.

Segovia, Juan Fernando

1993 *Julio Irazusta: conservatismo y nacionalismo*, Mendoza: Editorial Idearium de la Universidad de Mendoza.

Zuleta Álvarez, Enrique

1975 *El nacionalismo argentino*. Buenos Aires: Ediciones La Bastilla.